
妹は死んでも守りますっ！！

ハク白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹は死んでも守りますっ!!

【Nコード】

N1742S

【作者名】

ハク白

【あらすじ】

魔術最強の発展大都市『グランダ』そこは今まさに、国内だけでは足りない世界を巻き込みようとしている『魔術戦争』の引き金だ。まさに一発即発、そんな危険地帯に自らの『妹』を守るため少年は帰還した。少年は、大切なただ一人の家族である『妹』を守ることは出来るのだろうか……。『お兄ちゃん、男なんて早いと思うんだ。ねえ、聞いてる？ 認めない、俺は絶対認めないっ!!』

注）主人公最強系です、苦手な方はご勘弁を……。またタイトルの後ろに☆が付いているのは、妹目線ですので、あしからず。

プロローグ

魔法、超能力。

それは、決して伝説でもなく、おとぎ話でもない。人々がそう認識し始めたのはいつのころだろうか。歴史によれば、二世紀前の第三次世界大戦の時、ある軍が超能力と称して、使ったのが始まりだとされている。

それらは、後に、『魔法、超能力』から『魔術』へと名前を変えた。誰しもが使える、そんな便利なものでもなく、才が必要なのも、人間の道理だ。

魔術を扱う人間を『魔術師』と呼び、ある地域では神に仕えし者と称え、またある地域では災害の調べと軽蔑される。

だが、それすらも、一世紀前のこと。今現在では、誰しもが魔術を使い、そして世界各国が魔術師の育成に勤しんでいた。

大都市グランダ。そこに建つ『神立サラヴァン学院』では、幼い年代から、妙齢まで、幅広い年代の魔術師を育成させていた。

入学するためには、魔術の開花のみが条件であり、それ以外の変わったものはない。

そこに通うある一組の兄妹が居た。

兄は、妹に魔術とは無縁の生活を送ってほしいがために、妹は、兄を支えるために魔術師を目指す。彼らの意思は交差しては、混じり合っていく……。。

妹を守るため、帰還しますっ!!

「・・・うつわァ・・・。なっつかしィ・・・」

この街に来て、早数分。俺の第一声はコレだった。

最も『魔術』が発達、進歩している大都市『グランダ』

第一声でも分かる通り、俺の生まれ故郷だ。と言っても、此処に住んでいたのは、10歳までで、それからは、義理父おやじに着いて行つて、いろいろな場所を転々とした。

昨日、義理父の突然の死により、7年ぶりに帰ってきたのだが――
「街って、7年でかなり変わるもんなんだな・・・」

7年離れていたと言えど、それ以上に住んでいたこの街、そして生まれ故郷のことは忘れることはない。だが、俺の記憶していた街とは随分変わっていた。

今から、約4年前。この時は随分鮮明に覚えている。

なんてったって、俺が『魔術戦争』に加勢した初めての日なのだから。

――このころ、この街『グランダ』は『魔術向上都市』に認定された。

まず、人口が多い。それに、子供から妙齢まで魔術を教える学院みたいな場所があり、此処の人口の9割は魔術が使えると言ってもいいほどだ。

その時、俺の真下に大きな影が出来た。

「――なっ・・・。まさか、『浮上線』・・・!？」

真上を見上げると、そこには、小型の船のような形をして、人を乗せて動いているものがあつた。

あれは、ここらでは見ないと思っていた『浮上線』ふじようせんだ。魔術の力で、アレを浮かし、そして遠くの所へ人を運ぶ乗り物、いわば、前

時代のバスの役割を果たしている。

かなりの魔術力に加え、精密な組み立て、そして多額の生産コストを支払わなければ、作ることはおろか、導入することさえままならない代物なのだが――

「おや？・・・浮上線は初めてかね？」

俺が物珍しそうに、浮上線を見上げていると、突然、声がした。顔を向けると、そこには、歴史に詳しそうな老人が立っていた。

「あ、はい・・・・。というか、この街に久々に帰ったもので、なんか、変わったな・・・・と」

「そうでしたか・・・・。確かに、此処10年ですっかり変わりましたな」

「俺が此処に住んでいたのは、今から7年前で、面影がない・・・・わけじゃないんですけど」

「7年前・・・・だから、浮上線が珍しいと」

「・・・・かなりの、成長ですね・・・・っと、それよりも、どこか、何も変わってない所、とかありませんかね？」

「・・・・なら――」

と言って、老人は、指を指して「あそこなら」と親密そうにつぶやく。

あの方向は・・・・。

「分かりました。ありがとうございます」

俺は、すぐにその場所へと、歩き出した。

俺にも、この方向は覚えがある。

歩き出して、数分。いかにも『都市』という感じの通路を通り抜けると、そこには――

「・・・・・・」

言葉が出なかった。

そこには、一つの大きな『桜』の木が、季節関係なく、満開だったのだから。

かわらねえな・・・・。今も、昔も・・・・此処は。

俺はそつとの地面を噛みしめるかのようにじつくりと歩く。

「季節外れの『間違い桜』か・・・」

俺は、その桜の木の幹にそつと触れる。

此処は、俺のお気に入りだ。なんとなく気持ちが和らぐ。

間違い桜、それはなぜか枯れることは一切ない桜で、そしてなぜか桜の木はコレ一本しかない、という都市伝説みたいなものになっている。

「・・・ただいま。少し、遅くなったけど・・・わりいな」

俺は桜に語りかけるように優しく呟くと、来た道をそつと戻って行った。

俺が帰ってきたのは、ただの桜観光でもなく、懐かし麗し感動の再会を期待しているのでもなく、ただ俺の唯一の家族『妹』を守りに来たのである。

今、この街は、あまりにも危険すぎる。

発展都市だか、発達都市だか知らないが、人間、誰でも力を持てば、使いたくなるのは当然だ。

故に、この大都市は、国内では至らず、世界までの脅威となっている。

そんなことを構わず、この都市は国内の進行を噂されている。つまり、今まさに、一発即発状態なのだ。

もし、この都市が進行、またはどこか過剰なほどの愛国家が危険とみなし、攻撃でも行えば、戦争に発展するのは目に見えている。

IFの可能性。決して『0』とは言えない。

だから俺は、そんなときのために、『妹』を守りに来たのだ――・

かえでの一日ですっ!! ☆

胸ポケットに『櫻庭かえで』という鉄で出来たようなネームプレートを確認して、玄関に向かう。

櫻庭かえで、それは私の名前だ。事実、櫻庭という名字は貰ったに過ぎなく、私は戦争孤児。

記憶の一部が無くなっていて、名前は思い出せた。けれども、私には身寄りが分からなかったため、引き取られた先が櫻庭家だった。「行ってきたあゝす・・・」

例えばどんなに挨拶をしても返事は来ない、分かっているのだが、癖で毎日してしまう。鍵の閉め忘れはないか、どこか不備がないかと一通り確認して私は学院へ向かう。

今から行く場所は『神立サラヴァン学院』という、魔術学校だ。

6歳から入学可能で、最低卒業年齢は20歳という無茶苦茶な学校だが、この都市内ではここしか魔術を教わることが出来ないのだ、だいたいの子供が此処に入学をしている。

まあ、そのせいか人数はほんと多いんだけどね・・・。

「やっほおゝ、かえでっ♪」

「ひゃうっ!？」

「んゝ、いつ聞いても見ても感じて、可愛い反応だねゝ」

「も、もうっ!脅かさないでよ、加也ちゃんっ!」

いきなり後ろから抱きついてきた女の子。同じ学校に通う友達で、名前は『早乙女加也』

いつもだけど、どうしてか慣れないんだよね・・・加也ちゃんの抱きつき。どうしてだろう。

「んゝ・・・それは聞けない提案なんだよねゝ♪」

「どうしてゝ・・・?」

「だってゝ、かえでの反応が可愛いんだもんっ。もう、私の嫁決定っ!!」

「よ、嫁ってえゝ・・・」

うう・・・朝だっているのに、このテンションはどこから来るんだろう・・・。

かえでは、加也ちゃんが自分とは違う人間に思えて仕方がなかった。

そう考えていると――

「ったく、騒がしいなあ・・・お前は・・・」

丁度十字路の所で会う男の子、『前城大機^{まえしろ だいき}』も私たちと同じ学校で、初めての男友達だ。

「騒がしいって言われちゃってるよお、かえでえゝ」

「え・・・えと・・・。ごめ――」

「なんで櫻庭なんだよっ!? 加也、お前だよ、お前以外誰が居るんだよっ!!」

「ったく、うるさいのは、あんただって同じでしょ? 大機ィ」

前城と、加也が喧嘩するのは毎日だ。この2人は俗に言う幼馴染でお互い「こんな幼馴染いらない」と言っているけど、かえでにとって喧嘩するほど仲がいい、の代名詞みたいな、そんな存在だ。

騒がしいのは嫌いじゃなくて、どちらかというと、好き。あまりにもうるさすぎ、というのはどうかと思うけれど、聞いていて楽しい感じになれる。

2人を見ていると、不意に笑ってしまう。

「・・・くすくす」

「・・・って、櫻庭ァ、何笑ってんだよ、お前からなんか言っ
てやってくれよ」

「あははっ、だって、面白いんだもん、前城くん。だって、強い言葉
葉だけど、そこまで口悪くないよね」

「そ、そんなことねえって」

「そんなことあるのですよおゝ、前城くん。やっぱり、優しいね♪」
「な、ななな、何言ってんだよ、さ、ささ櫻庭はっ!!」

真っ赤になる前城大機。

どうしたんだろ……。熱でもあるのかな。

「あははっ、大機、どもってるう。それに、真っ赤だよぉ？」

「う、うるせっ！加也は黙ってる……。！」

「怖い言葉ぁ……。大機がいじめるよぉ、かえでえ」

加也がかえでの後ろに隠れるようにして、陰に入る。

「ちょ、加也ちゃん……。なにしてるの？」

「うふふ……。大機の弱点は……。コレだっ！！」

そう言うと、加也はかえでの両肩に手を乗せると、大機の前に突きだした。

突然だったため、少し足元をすくわれるが、すぐに立て直す。

「……。っ！！……。加也、お前え」

普通なら、これくらいされて気がつくだろうが。かえでは、私が嫌いなのかな、という認識しかなかった。

「これくらいしないと、大機、望み薄だよぉ？」

「くう……。悔しいけど、加也の言うとおりでなんだよな」

「……。？どうしたの、陰で2人で。秘密の話？」

「ああ、それはこいつが、かえでえ——」

「何話そうとしてんだコラ？——櫻庭には関係ないから、うん、全然これっぽっちも」

「……。？」

歩き始めて数分。楽しい時間も終わりを告げた。

目の前にあるのは、神立サラヴァン学院。

大きさは、そこらへんの高層ビルと何ら変わりなく、全校生徒は約4000を超えていると言われている。

下から上に上がるにつれて、ランクや年齢が上がっていき、私たちは16歳のランクBという普通のクラスなので10階の層だ。

「はぁ……。クラスまでお前と同じってのが笑えねえ冗談だよな……」

「いいじゃん、大機。私が居るところには、絶対にかえでが居るんだからあゝ」

「な、なんでそこに櫻庭が出て来るんだよ」
「なんで私が出て来るんだろう……。やっぱり、嫌われてるのかな、大機くんに。」

俯きながら歩いていると、突然聞き覚えのない声でかえでを呼んでいる声が聞こえた。

「あ、あの……。かえで先輩……。ですよね？」

その声は男の子で、先輩って言ってることは後輩なんだと感じ取ることができた。

「えっとおゝ……。そう、だけど……」

「僕の名前は鹿島雄平^{かしまゆうへい}って言います。その、お話があるんですけど……」

「此処じゃ、ダメ……。かな？」

「あ、えと……。その……」

鹿島雄平は大機と加也を気まずそうにちらちらと見る。

それに気付いたのか、2人は少し離れ、遠くから様子を見守ることにした。

「ほらあゝ……。いいの？大機い……」

「な、何がだよ」

「あの子、っと鹿島雄平くんだったっけ？彼、結構中等部じゃあ、人気だよ？ランクAで、顔よし正確よし頭よしの天才くんだよ？」

「だから何がだよ！……。櫻庭が誰と付き合おうが、俺には関係ないだろ……。」

「へえゝふうゝん、ほおゝ」

「気持ち悪いなあゝ言いたいことがあるならハッキリと言えよ」

「いやあゝ、臆病者、チキン、意気地なしって思ってたなんかいないよおゝ」

大機は、その言葉を受け流し、かえでを心配そうな目で見ていた。数秒経つと、かえでが2人の所へ戻ってくる。

「また告白うゝかえでえ？」

かえでは、真っ赤になりながら小さく「うん」と答える。

「アレアレ、その反応って、まさかまさかあゝ？」

「ち、違うよっ！・・・で、でも、その告白の言葉が恥ずかしいというか、なんというか・・・」

「へえゝ、教えてよお？」

「だ、ダメだよっ！一生懸命に考えて私に言ってくれた言葉を言いふらすなんて、いくらその頼みが加也ちゃんでも、無理だよお・・・」

「ま、それもそっか・・・。ったく、ほんと何回目？かえでが告白られるの」

「え・・・っと・・・覚えてない、かな・・・」

「うわあゝ・・・。朝に食パンを食べた回数なんて覚えてない、みたいなのりだよ、それは」

「そ、そんなことないもんっ。わ、私、朝はご飯派だから、食パンは食べないもんっ」

「そゝゆゝ問題じゃないんだけどね・・・。ま、あんたに泣かされている子は大勢いる、と」

「ううゝ・・・。なんか誤解を招く言い方だよお、それ・・・」

「でもさあ。かえでって、どうしてそんなにふっちゃんなの？結構良い線の奴とかいっぱい居たでしょうに」

「こ、恋には、今は興味ないかなあゝ・・・なんちゃって・・・」

「・・・かえで、もしかして好きな人とかいる系なの？」

「な、なんだってえっ！！！！」

それまで黙っていた大機が突然大声を出す。

ひうつ・・・。びっくりしたよお・・・。

「そ、そんなこと、ない・・・よ？」

「なんで疑問形なのさあ。・・・もしかして凶星なんじゃないのゝ」

「ううう・・・。ひどいよお、加也ちゃん・・・」

「そんなに真っ赤になっちゃってえ。こりゃあ、大発見だなあ♪」

かえでは、萎れる花のように俯く。

そして少し離れた場所では、柱に頭突きを何度もしている大機がいる。

にゅふふ、と嬉しそうな加也。

どうしてだろう、加也ちゃんはいっつも、鋭い。私が隠していることお見通しなのかな・・・？

そう、私は1人の男性を一途に思い続けているのだ――・・・。

かえでの一日その裏側、見せますっ!!

間違い桜を離れて数分。俺は、久しぶりの実家に向けて歩いていった。

幸い、道はあまり変わることがなく、思いのほかすいすいと家まで歩くことが出来た。

「・・・っと、此処・・・だな」

とくに荷物はない。俺の思考は突然帰ってきた兄に驚いて熱く抱擁を交わす兄妹の姿を思い浮かべていた。

いやあ、どうしようか・・・。「お兄ちゃん」なんて感じで跳びつかれたら、俺きつと自分を抑えられない自信がある。

あと数メートル、たぶん数秒単位だろう。その時、家から丁度出て来る人影が見えた。

とっさに俺は見つからないように物陰に隠れる。

「行ってきたあゝす・・・」

この声は・・・。

俺はそつと物陰から声主を見る。

「・・・かえで・・・!!」

そう。その、今家から出てきた少女こそ、俺の妹なのだ。

見つからないように、玄関まで駆ける。

そこには懐かしの『櫻庭家』という札が掛けてあった。そしてその下には『櫻庭志雄、安、零、かえで』と書いてあった。

上の2名。それが、俺とかえでを受け止めてくれた義理の両親だ。そして、そのすぐ下、『零^{れい}』俺の、名前だった。

自分の名前を見ると、急に懐かしく思えて、少し景色が滲んだ。

「・・・っと、かつこわりいところ、かえでには見せられねえよな・・・」

俺は、かえでが歩いて行った方向を見つめ、そして追いかけて行った。

「うん、分かった」

親子はすぐにその場を離れて行った。

なんて失礼な……。俺はただただ妹を父親のような目で見つめていただけなのに。っと、気を取り直して……。

俺がかえでの方を向くと、そこには――

「男……っ!？」

そんな、男だと……。お兄ちゃんは許しません。お兄ちゃんは許しませんよ……。

「前城くん、優しいね」

「そ、そそんなことねえよ」

「そうなのですよぉ――」

「――くぅ……。っ!! 認めん、認めんぞ、俺は……。!! 今すぐあの男を血祭りにしてやろうか……」

そうすれば、かえでは毒牙にやられることはない。一切ない。心配ない。

よし、今すぐにでも決行――

零はそこで言葉を失った。なぜなら、かえで達が入って行った学校はまさに俺が通っていた『神立サラヴァン学院』なのだから。

「どうして……」

なぜかえでがこの学校に居るんだ。かえでだけは、魔術に関わらず、一般の女の子として生きてほしかったのに……。

零が絶句するのにはわけがあった。それは、一発即発のこの大都市、もしも戦争が始まった場合必ずと言っていいほど、此処の生徒も戦争に駆り出されるからだ。

「むさっくるしい男どもは勝手に赴いて勝手に死ねばいい。でも――」

かえでが死ぬ理由はない。

零はまず俺が此処に來た理由を定義した。

「……妹を、守るため……」

なら、俺がこの学校に再入学すればいい。そう、かえでがなんで

魔術を習っているのかは分からない、でもかえでの夢だとしたら、俺が無理やり壊す必要はない。

「そうときまれば・・・さっそく、転入手続きだ・・・」

俺はうる覚えの状態で、学院内にある、事務室を目指したのだった――・・・。

戦争勃発・・・しそうですっ!!

さすがに、登校時間内に私服で校内をうろつくのは危険だ。そのくらいは分かっている。

だが――

「かえで、俺はお前が心配だ・・・。実は男が居たりとか、そう言うオチ、やめてくれよ・・・?」

祈るように零は気付かれない程度でかえでを尾行する。

その際、当然他の生徒に気づかれる訳で。

「やだ・・・何アレこわい・・・」 「先生、呼んできた方がいいんじゃないね?」 など、いろいろ愚痴を言われる。

ったく、いちいち五月蠅いやつらだ。あ、ちなみに、『五月蠅い』の漢字って5月のハエがとくにやかましいから、当てられた当て字らしい。

「つと、今はそれどころじゃねえ・・・」

零がかえでの方向を向くと――

あれ・・・。さっき居た女友達と、血祭りにあげたる対象が、いなくなってる。

そして代わりに居たのは、かなりの美形で、いかにもモテそうな男の子だった。

も、もしかして・・・。もしかしてもしかすると――

「ほんものの彼氏・・・なのかつ!? いや、違うな、うん。お兄ちゃんとは信じるぞ。若干こめかみがピクピクしているけど、気にしないでくれ?」

どこに向かって話しているのか分からないが、零は取り合えず神に話しかけていた。

神様、神様・・・。お願いです、かえでに近づく俺以外の男ごみを排除してくださいっ。

「・・・あ、あなたは、僕の運命の人ですっ!!・・・つ、付き合

って下さいっ!!」

「・・・は？」

もしかして、今のって告白なのか……。ってことは、かえでは誰とも付き合っては——

「ごめんね……。その、私・・・」

「そう、ですか……。えっと、理由を聞かせてもらっても、良いですか？」

「り、理由・・・？」

「はい……。なんでも良いんです。その・・・罵倒とかでも・・・。そうでないと、僕あきらめがつきそうになくて・・・」

諦めろ、かえでは、俺にメロメロなんだ・・・。

零は、心でその少年を「負け組」と罵倒し続けた。

「実は・・・その、好きな人が——」

な、な、な——

「なんですと——っ!？」

嘘だっ。嘘だ嘘だ嘘だ・・・。

きつと聞き間違いなんだ。うん、そうだ。かえだが、あのかえでが——

「——居るんです・・・」

「それは、僕には到底追いつけない人・・・なんですか？」

「はい……。その、ドジでバカで、その癖、人の上ばかりを見て、時々妄想が激しくて、1人で突っ切っちゃって、間違えて・・・」

「・・・えっと・・・」

「——でもっ。でも、やる時はやる人で、それでいて遅たぐましくて、私を・・・見守ってくれて……。さみしい時とかも、一緒に居てくれた……。そんな人・・・です」

その時、太陽がかえでの顔に宿ったかのように、輝く笑みをした。
「・・・たく」

そんな笑みをさせられちゃあ・・・俺が出る幕はねえじゃんよ・・・

・。

そんな笑みに見惚れたのか、男の子はもう一度息を吸い込んで――
「どうやら、僕はかえで先輩のこと諦めきれなさそうです。・・・
そんな表情をさせる人に僕はきつと成って見せる・・・」

「・・・ふふっ♪楽しみに待ってるね♪」

「は、はい・・・では・・・。あ、あと、かえでさん。その好きな
人のことを言っている時、とても顔が赤かったですよ。治していか
ないと、もしかしたら冷やかせるかも――って行っちゃった・・・」
確かに赤かった。それはもう完熟したリングの用に赤く――

「あ、ああ。俺の目元も赤くはれ上がってるんだろうな・・・」
これが失恋ってやつなんだね・・・。うう、涙できっと目元大変
だ・・・。

零は、この時の失恋の痛みは間違いだってことに気がついたのは、
それまたずっと後のこと・・・。

零は気を取り直して、今は事務室に向かっている途中だった、の
だが――

「うーん・・・。どうして、俺は今、理事長室の前に居るんだ？」
それはさかのぼること数分前。なぜか零は警備員のような人たち
に取り押さえられていた。

アレか。実は理事長は俺のことが気になっているのか。

「里村理事長。例の者、連れてまいりました」

2度、コンコンと扉を叩いて、警備員が告げる。

「あ、例、じゃなくて、零なんで。そこんどこ、重要だぜっ？」

「黙れ下郎。俺の靴下、嗅ぎたいか」

「それどんな刑罰だよ。っていうか、それが一番精神に來そうだな
っ！ー！」

「その刑罰でどれくらいの間が犠牲になったか・・・」

ああ、そのくらい臭いのね・・・。

「お勤め、御苦労さまですっ!!」

「五月蠅い。理事長の前だぞ」

理事長の前だって……。返事も何もないじゃねえか……。

「貴様の考えていることは分かる……。だが大人しくしている、
今、彼女は、あんなことやこんなことの真っ最中だ」

「なに、その如何わしい発言っ!! ちょっと今から此処に入る俺の
身としては期待しちゃうよっ!!」

零が警備員に突っ込みをした時、突然声がした。

「……入ってこい」

「……では、失礼します……」

そっと警備員がドアを開ける。

そして瞳に広がった世界は――

「うっわ、理事長室」

「当たり前だ。ここは理事長室なのだからな」

「いやあ……。今時、純粹に理事長室ってウケ悪いよ? 必要な
いよ? ……ったく、面白味がないねえ」

「理事長室に面白味を求めて、どうするのです? 私が、毎日ウハウ
ハしていると……?」

奥に居た人物。たぶんそれが理事長だ。

警備員が敬礼をしているくらいだからな……。っていうか、敬
礼している時点で、『警備員』じゃなくて『警察官』じゃ……。

「下がって良いぞ?」

「はっ! 了解いたしました」

「また後でなっ♪」

「お前といつそんな仲になった!」

「そんな仲って……。男の口から言わせる気い? ……もしかして、
そういうプ・レ・イ?」

「警備員さん。彼は私が調教こころしといてあげますから、ご安心を」

「是非、お願いします」

そっとドアが閉まっていく。

ったく、ノリが悪いなあ……。

「久しぶりですね……。櫻庭零」

「……。はあ。やっぱり俺って昔から変わってない？ 里村理事ちよー？」

「いえ、随分と遅くなりました。……。で、何のために、この学校、いえ、この大都市に來たのですか？」

「來た、って失礼な。俺は、観光目的に此処に來たわけじゃない。此処は俺の生まれ故郷だ」

「……。そうでしたね。ですが、櫻庭——」

「義理父なら死んだ」
おやじ

そういうと、理事長は目を丸くする。

そりゃ驚くよな……。なんたって、この学校の元理事長で現役のこの人の師匠なんだから。

「それは一体……」

俺は、胸に手を差し込み、そしてペンダントを取り出す。銀色で、トライフォースのような三角形がいくつも重なっているロゴだ。

「そ、それは——！！」

「ああ、御察しの通り、『連合軍』の隊員の証だ」

零が先ほどもでとは打って変わってまじめな顔つきで答える。

心なしか、声も若干低めになった。

「覚えているだろ？ いや、忘れたとは言わせない。……。今から2年前終結した戦争、『魔術戦争』を……。」

魔術戦争。それは今から4年前に勃発した、世界大戦だ。

力をもった人間は自分を抑えられなくなる。大きな力を得た国、都市が世界に3つあった。

初めは『アルバーン』という国。次に『大都市エンゲル』、最後に『大都市ジェリング』

この3つは力を合わせ、世界を乗っ取ろうとした。それに対抗すべく、世界が各国から集めた魔術集団『連合軍』。その2つの戦力が起こした戦争を『魔術戦争』という。

「今、あんたはこの大都市『グランダ』の状況を一番把握しているはずだ・・・」

「・・・私にどうしろと・・・？」

「簡単なことだ——」

「即刻、この大都市の中心人物を殺せ・・・!!」

零の眼光は研ぎ澄まされた刃のような鋭さをまとっていて、そして冷淡かつ単調に、その言葉を発したのだった——・・・。

裏切り者しますっ!?

もしも外に聞かれたら、ただ事ではない。それくらいは知っている。だが、零はあえて、怒声混じり声で言い放った。

「・・・確かに、現状ではそれが一番いい方法だと、思いますが」

「俺の予想では、アルバーン、エンゲル、ジェリングの3つの内のどれかが、グランダを干渉している。・・・戦争に持って行こうって訳だ」

「確かに・・・その可能性は無い、とは言えませんが・・・です。が、我らの中心人物がそんな簡単に加盟するとは思えません」

「そういう信頼はいいと思う。だが、逆にその決断が仇となることがある・・・そうだろうか」

理事長は、コクリと静かに頷く。

そう、それは、加盟を断り続けた時、相手側がどう出るか・・・それが心配だ。

この大都市は今、最も発展している都市。故に、力を欲し、世界を取ろうなんざ馬鹿げていることを考えている連中にとっては、グランダはこれ以上ない大きな戦力とカス。

つまり、拒否し続けた場合、相手側が、強行手段に出るかもしれない、ということだ。

「失敗し、相手の機嫌を損ねた場合でも・・・この大都市は戦場と化すでしょうね」

「ああ・・・手っ取り早い話、今交渉をしているであろう人物を、殺せば済むこと。理由はなんでもいい、病死、寿命、自殺、暗殺・・・ってな」

「ですが、それではまた中心人物を変えた時、干渉をされるのでは・・・?」

「いや。今現時点でのグランダは危険視されている。つまり、裏返せばこの中心人物が危険視されていると同じ意味だ。・・・代表

を変えちまえば、連合軍などの助けを借りることも可能だ」

ただしそれは――

「ただの憶測おくそくにすぎませんね・・・」

――そう、ただの憶測だ。こうなれば良い、という甘い考えなのだ。

「分かっている・・・。でも、可能性は無いわけじゃないんだ。かけてみるっていうのも、ありだと思うが・・・？」

0と1ではかなり違う。例えば、1割の確率だったとしても、それは成功するということなのだから。

零は、理事長の判断を待った。別にこの人が、どう言おうが、どう感じようが俺には関係ないのだが、昔お世話になった、という名目で意見を聞いている。

「・・・少し、待ってみてはいかがでしょうか？」

「それなりの策は思い浮かんだのか？」

「逆です。『策』がないからこそ、今はまだ落ち着いて現状把握、それに因ちなんだ策を考えて行けばいいかと」

確かに、それは最もな意見だ。早合点しすぎて、失敗とも成れば、ごめんで済まない。それどころか、この大都市が世界を敵に回すかも知れないのだ。

だが・・・かえだが・・・っ。俺のかえでの命がかかっているんだっ。

「・・・そんなかえでのことが心配なのですか？」

「当り前だっ！！俺の、妹、女神、アイドル、妻、嫁、娘、萌えキヤラなんだっ！！」

「突っ込み要素満載ですが、今はそっとしておきます」

「ふっ・・・。あんたみたいな、しわだらけのお婆さんにはわかんねえさ。妹の可愛さわ・・・」

「ぬっ殺しましょうか？」

「・・・ごめんなさい。ぬっ殺すってなんか、殺すって単語より微妙に嫌だからごめんなさい・・・」

「・・・変わっていませんね」

「あんたは老けたな。とっても・・・」

「やっぱり、生かせておけませんね。あんたみたいなハゲ」

「ハゲてねえよ。っていうか、ハゲって微妙に傷つくからやめて・・・！」

零は頭に生はえているフサフサの髪をいじりながら、理事長に背を向ける。

話も終わったし、後は・・・俺の萌えキャラヒロインの妹の教室に転入するのみっ。

「零・・・あなたみたいな人が此処に居たら・・・不便でしょ？」

「力を存分に使えないってか？・・・バカいえ、感動の妹との再会は兄がめっさ強くなってることが相場で決まってるだろ？」

「そのためだけに、強くなった？」

「俺は戦場に居たんだぞ？・・・無理矢理でも強くなんなきゃ生きていけなかったのさ。まあ、ちよつと妹に『カッコイイ』って言われたかったってことも、無いと言えぼうそになる」

「・・・それは、何割くらい占めていますか？」

「8割くら——」

「ほとんど私欲のためだけに戦場に行ったのですね・・・」

「いいじゃねえかつ！！妹に『お兄ちゃんすごーいっ』って言われたったのっ！だって、全国のお兄ちゃんの夢だよっ！！」

「全国の兄にそれを言えますか？」

「ごめんなさい。たぶん無理です」

「はあー」とため息が聞こえた。零は、やっぱり変わらねえよ、そう思いながら、ドアノブを回しそして——

「最後に一つ・・・」

胸に手を差し込み、先ほどとは違うペンダントを見せる。

「——あなたそれはっ！？・・・なるほど、本当ならば、今殺さなければいけないのは・・・零、あなただったのですね」

「・・・物騒なこと言うなよ。俺は、この大都市に来て、あんたに

話した時点で、未来は2つにわかれちゃったんだよ」

ま、どの道を選んでも、俺の肩書が『裏切り者』に成ることは、代わりないんだけどな・・・。

零は、振り向きはせず、事務室へ向かった。妹、かえでのクラス&隣の席を確保のために――・・・。

事務室探しますっ!! (前書き)

初めに言っておきます……。すみません、少しグダグダになってしまいました。転入することをネタにすることは考えていなくて・・。

次回は、考えてありますので、あしからず・・。

事務室探しますっ!!

面白味が一切ない理事長室を抜け、そして――

「さつてとおゝ・・・。事務室は、確かあゝ♪」

零は、記憶の断片をまさぐりながら、その場所へとノリノリで向かっていった。

ふふゝんっ。なんてったって、俺のアイドル兼萌えキャラ近くに毎日これから居られるんだからな。

っと、確か、この角を右に曲がって――

「・・・？」

この角を、右に曲がって・・・。

「アレレ・・・。ちよつと待て、なんで事務室が、ジム室になってんだよっ!?! おかしいだろ、なんだよ、事務員がここでハッスルするの catt!?!」

――迷っていた。とめどなく、迷っていた。

「聞いてねえよ。アリかよ・・・そんなの」

零はトボトボとジム室に向かう。当然、部屋に入る前の扉には窓ガラスがあるわけで。

「・・・うっぷ・・・」

零は手を口にあて、^{かが}屈みこむ。

見ていない。俺は何にも、見ていない。・・・うん、肉塊で肉弾戦車なんて一切見ていないぞ。・・・よし、此処は、かえでの笑顔を思い出すんだ。思い出せ、あのほんわかした、最高の笑顔を・・・。

「あゝ・・・さいっこうっ!!!」

って、今はそんなことじゃねえ。その最高の笑顔を守るために、

編入するんだろ。

零は、絶対に窓を見ないように、後ろを見ながら、立ち上がる。

その時――

「いやあ、今日も良い汗かいたな。これで、事務が出来るって訳だ」

「そうっすねえ、先輩。ついでに、今日は何本シャーペン折れるか新記録しましょうよ」

零の丁度後ろで、窓があき、声が聞こえた。

意味わかんねえよ。汗かいて事務の仕事ってどんな神経してんだよ。シャーペンはちよつと見てみたいけど、可哀想だろっ。

「アレ、先輩。なんか、見ない生徒が・・・」

「ほんとだな。おい、お前、そこで何してる!？」

零は後ろを振り向く。

ああ、俺今猛烈に吐きそう……。なんで、俺が野郎の汗ばんだ肉塊の身体を見ないといけねんだよ……。

「きみ……」

「あ、あのおく……。頼むから、それ以上近づかないで、お願い。一生のお願い」

「……いい身体しているな」

「お前死ね。キモい、ハゲろ、とにかく近づくな。……っていうか、何? お前、アッチ系の趣味があるのか?」

「……攻めなら自信がある」

「やめて、お願い。やめて?」

「っていうか、先輩。早く行かないと、仕事遅れますよ? ……そんな知らない人なんてほっておいてさあ」

後ろに居るこれまたマッチョな男がそう言うのと、「それもそうだな……」と言って、俺の横をすぐにすり抜けて行った。

何、ここっ。学院として、いろいろ突っ込みたいよっ。っていうか、俺が居た時、こんなの無かったぞ。

「ああ……。お兄ちゃん、やっぱりかえでをこの学校に居させ

るのはやめようと思うんだけど、かえでなら聞いてくれるよね？」
零は、喉まで迫ってきている吐しゃ物をなんとか堪え、本当の事務室を探しに歩き出した。

ジム室から離れて、丁度10分と言うところだろうか。零は、あることに気がついた。

思ったんだけど、事務室って普通は、学校の一番下か上だよな。そんなことになんて俺は気がつかなかったんだろう……。

「まずは、上から行ってみるか……」

記憶頼りに、上まで上がれる、前時代という 에스カレーターを探す。

つと、発見……。つて――

「マジか……。『浮上階』ふじようかいになったのか……」

浮上階。その原理は、浮上線と同じで、ただ違うのが、少ない人数と、動ける範囲が上下か左右の2択だ。

導入はさほど難しくはないが、コストが少し高い。故に、学校ではあまり見ないのだが……。

これも、発展都市ならではのところかな……。

零は、浮上階に入り、そして上を目指した。

よし、いいぞ、俺いいぞっ。あと少しで、お兄ちゃんが毒牙から守ってあげるからな。

「~~~~♪」

ピンポーン

機械音が成り、目の前の扉が開く。すると目の前には――

「きたぁーっ！ 『寺務室』 っ！ っ！ っ！」

ちよっと何かが違うと思うけど、たぶん大丈夫。

零は、また扉に付いているガラス越しに様子を見る。心なしか、

皆がハゲているのは間違いだろう。

「すみませーん。あのお、ちょっと聞きたいことがあー・・・」

零が勢いよく、ドアを開ける。すると、ハゲたおっさんたちも
のすごい勢いでこちらを凝視した。

こわ・・・。何これ、皆ハゲてるし、それで何か、皆茶色い服装
をしているんだけど・・・。

「あ、あのお・・・」

「キミも、寺の職を貰ってきたのかね？」

「・・・寺？」

「・・・寺務室って書いてあっただろう？」

おいおいおいおい。『寺務』室だったのか。嘘だろ。しょーじき、
需要ねえよ。読んでる方たちだって、『あーまたそのオチかよ』の
くらいの認識しかなくなってくるよっ。

「・・・まずは、そのフサフサの髪の毛を——」

「いえ、結構です。すみません、また饅頭を3つほどお供えします
んで、じゃ——」

零は、勢いよく、扉を閉め、浮上階に戻った。

もうダメっ。お兄ちゃん、くじけそう・・・。・・・いや、此処
でくじけたら、あの天使の笑顔が・・・。

頭の中で聞こえる、聞こえるぞ。『お兄ちゃん、助けてえー
いやあーっっ！』って聞こえる。お兄ちゃん、頑張る、頑張る
よっ。

ピンポン

正確な機械音が鳴り一番下の階に到着する。

あー、ピンポンってこういう時、なんかうぜえな・・・。

零は、即座に職員玄関へ向かった。

「おお・・・あった、あったぞ。ついに、見つけたんだっ！！」

職員室を——

ってバカなことやってないでさっさと行くか……。

零は上にある札を良く確認して、扉をあける。

「しつれーしまーす」

正確な事務員が俺の方を向く。

たったこれだけなのに、感動する……。俺って、さみしい子。

「何か御用が……？」

「ああ、俺を転入させてほしい」

「は……？」

「は……？じゃなくて、転入」

「その、意味が今……」

「ええい、うるさいっ！とにかく俺を転入させろっ！！……大体、意味わかんねえのはこっちだって同じだっ！なんだよ、ジム室だか、寺務室だかって。意味わかんねえよ！」

「そんなこと急に言われましても……」

零が口論をしている時、ドアが突然開いた。そこには、俺を理事長室まで連行した警備員が居て――

「理事長の命令だ。そいつを、入学させろ……と」

「おおっ。あんたやっぱいい奴だなっ！！さすが俺に羞恥プレイを望んだ男だっ！！」

「今からでも、取り消しは遅くないんだぞ？」

「ごめんなさい……もう言いません」

こうして零は、晴れて高等部1年Bクラスに編入することが出来たのだった。

まあ、何が『こうして』なのかは……。気にしないでくれよ……。

転人生来ますっ!! ☆

かえでは、席に座りながら、晴天という青空を眺め、はあ、とため息をこぼした。

「かゝえでっ♪どくしったの♪」

「ひゃうっ!?!?・・・もおゝまた加也ちゃんでしょう・・・」

「あははっ正解っ。・・・それよりもさ、どうしたの?外なんか眺めて」

そんなことしてたのかな、私・・・。

かえでは、そんなことしていないよ、とでもいうように、首を横に傾げる。

「なになに、無意識のうちにため息なんて吐いちゃって・・・。もしかして、春が来ちゃったとかあゝ?」

「そ、そんなことないよおゝ・・・。だ、だからさっきも言ったように、私にはまだ恋なんて――」

と、そこで、かえでの声はドアを開ける音によって消される。

あれ・・・次の教科って、あの先生じゃないような・・・。
かえでは、またしても首を傾げる。

「ありゃ?なんなんだ、一体・・・。次の教科ってあの先生じゃないよね・・・」

加也がかえでの気持ちを代弁したかのように、リンクする。

「って、なんで笑ってるのさ、かえでえゝ」

「だ、だって、私の思っていることと、加也ちゃんが思っていることと同じだったんだもんっ」

「・・・。ったく、可愛いなあゝこいつあゝ」

そう言って、加也がかえでの頭をグシャグシャとかき混ぜる。

「ひゃんっ。・・・やめてよお、せっかくセツトしたのに・・・」

ううう、と涙目になって唸るかえで。その姿は、とてつもなく可愛く、そこに居た男子生徒の心を半分以上射止めた程だった。

そんなことも知らず、かえでは、グシャグシャになった髪を綺麗にまたセットしなおして――

「むうつ……。加也ちゃんの……。バカっ」

わざとらしくかえでは頬をぷー、と膨らませる。

その頬を加也は「ツンツンッ♪」と呟きながら突つつく。

「あう……。ちよっとくすぐった……。」

「じゃあもうっつとやっちゃおっと♪」

そう言っただけは、頬ではなく、かえでの脇をいじくる。いわゆる「こちよこちよ」という代物だ。

「そ、それだけは、やめてえ、加也ちゃんっ。私がそれ弱いこと知ってるでしょっ」

「ふふふ……。堪忍しゅやあ……。」

加也が黒いオーラをまとった笑みでかえでに近づいて行く。その時――

「こら、加也。いつまでそうしている……。席に着け」

「……。ちえっ。今から良い所だっのにさ」

かえでは、この時ばかりは、先生を神様だと崇めた。

ありがとー先生……。私、きつとだらしなくなっちゃうから……。

「……。よし。みんな席に着いたと……」

先生は、一度クラスを見回すと、次に名簿を確認する。

どうしてだろ……。今、確認済んだなら、名簿なんて見ることはないのに……。

「えっと……。じゃあ、とおやま遠山っ！机と椅子、セットで一つ持ってい

「どうして俺が――」

「このクラスの委員長なんだろ……。ほら、さっさと行くっ！」

遠山と呼ばれた男子生徒はダルそうに「はぁい」と呟いて、教室を出ていく。

「あのおー、誰か来客が来るんですか？」

あ、加也ちゃんだっ……。やっぱり、率先して質問するなんて、すごいなあ……。。

かえでは、立って質問をしている親友加也を尊敬のまなざしで見つめていた。

「……来客、とはまた違うな……。つと、遠山、御苦労さん。そこらへんに置いておいてくれ」

先生は一番後ろの窓側を指さし、遠山はそこへ丁寧に置く。さすが委員長という所で、前の席に合わせちゃんと綺麗に置いた。

「……よし、これでまた全員そろったな……。突然で悪いな……。実はこのクラスに転入生が来た」

先生が唐突かつ端的に言い放つ。当然、生徒たちは唖然とする訳で。

そしてかえでもその中の一人だった。

転入生……。でも、どうしてこんな中途半端な時間に……。

ついさっき2時間目が終わった時刻だ。普通は、朝の時間にくる訳だから、こんな疑問を抱いてもしょうがない。

「ん、んんっ……。ええ、朝には間にあわなかったらしく、今来たばかり、とのこと」

何回か咳払いをして、言葉をつなげる。

遠くから見ても、どこかあせっている感じだった。

「……で、では入ってきてもらおう……」

そう言うと同時に、前のドアが開く。そして、そこからゆっくりと歩いてきた生徒を見て、かえでは絶句した。

なぜなら、それは昔、離れてもう会えないと思っていた初恋の人

「はじめまして……。えっと、かたっ苦しいのは嫌いなので、名前だけ」

そういつて、男子生徒は黒板に名前を書いていく。

「櫻庭零、と言います——」

――兄の姿があつたからだつた・・・。

喧嘩しちゃいますっ!!

零は今、教室の前に立ち、大勢の生徒の注目を浴びていた。

ちっ……。何だよ、男ごみばっかじゃねえか……。んで、それよりも、かえでかえでえーっつと……。

零は、周りを見渡す。さすがに少し自己紹介が遅かったせいか、横で先生が耳打ちをする。

「えっと、零くんだっけ？……早く自己紹介しなさい……」
つと、そうだった。んで、初めが肝心なんだよな、かえで。
零は、真っすぐ前を向いて、はきはきとした口調で言った。

「櫻庭零といいます。正直、あなたたちのようなゴミに興味は一切ありませんし、関わる気もありませんし、近くによるだけで、吐き気がします——」

そう、はきはきととても良い声で、本音を暴露する。
そして、さわやかな笑顔で零は言い放った。

「——よろしく、みなさんっ♪」

と……。

教室中が哑然とする。それはもう、誰も声を発してはいけないうなゲームに匹敵するくらいだった。

先生ですら、目を大きく開き、言葉を失っていた。
……どうしたんだ。……石化の魔術でも使ったのか……。

「先生……？」

零は、横で立っている先生に話しかける。

うっわ、何こいつ、キモっ。なに、目を大きくあけて石化してんだよ……。これだから男っていうのは……。まあ、かくいう俺

も男なんだけどな・・・。

「あ、ああ・・・。席は——」

転校生の席は後ろと相場が決まっている。誰だって分かるだろう。だが——

それでは、かえでとは遠いじゃねえかよ・・・空気読めよ、同じ名字でしようが。

零は先生の耳元でつぶやいた。

「俺、かえでさんの隣がいいなあ・・・」

「な、何言ってるんだい、そんなこと——」

「隣がいいって言ってんだろ、聞き入れろやこのゴミっ!」

「・・・真田^{さなだ}くん、席を譲ってあげなさい」

真田と呼ばれた生徒がその場を立って、講義をする。

「どうして僕なんですかつ!?・・・折角、かえでさんの隣になれたのに・・・!!」

かえでの隣は俺なんじゃこのさわやか系肉弾戦車っ。本当はその肉塊でかえでを襲うつもりだったんだろっ。

ギンっ、とでも言いそうな眼光で真田を見つめる。

「・・・分かりました・・・」

ふっ・・・。力ってやっぱ凄いつ。あの三つの国と大都市が使いたくなるのはよく分かったよ。

勝ち誇ったような笑みで零はその場所へと歩いて行く。

数人の男子生徒からにらまれたが、零は気にしてはいなかった。なぜなら、後数メートルで女神さまに会えるのだから・・・。

「・・・隣、座りますねっ♪」

零は、かえでに笑顔を振り向ける。だが——

「・・・ふんっ」

びしっつ。

気のせいかな、俺の見える世界にひび割れが入ったような・・・。

「そうやって、力づくで奪う人は・・・嫌いですっ」

びしびしっ・・・。

零の頭の中では、『嫌いです』『嫌いです』『嫌いです』と同じ単語ばかりリピートしていた。

う、嘘だろ……。そんなこと、ないよな。かえでは、優しく、俺にメロメロなんだよな……。

だが、その言葉は嘘ではなく、俺が話しかける度、無視無視無視だった。

零の姿は、しつこいナンパ野郎に見えたに違いない……。

やがて下校の時間となる。零が話しかけようとした瞬間――

「いない……。何故だ、かえでえ……。…」

零は、トボトボと窓越しに生徒を眺める。

はあ……。この生徒は多いが、校舎はほんとでかいな……。

7年前も変わらない。この大きさは、俺の記憶の断片と重なった。「……。かえでは、俺のこと、覚えてるよな……。？もしかして、忘れてるのか？」

突然零は不安になる。それは、昔のかえでの記憶のことだった。かえでは、幼いころの記憶がない。零が孤児院に居た時、先生の一人が泣いているかえでを連れてきたことを鮮明に覚えている。

俺たちの仲間入りをした時は、随分と怖がっていたっけ……。それで、俺が率先して声をかけ続けた挙句、俺にだけ懐いちゃって終いには「零お兄ちゃんが貰われるなら、私も貰われる」なんて言っちゃって……。

でも、結局生活していても記憶は戻らなかった。もしかしたら、それは定期的に出る記憶現象なのかも知れない……。それが、発症しちゃって零という存在すら、覚えていないのかも知れない……。そう考えると、零は急にさみしくなって、つらくなって……。少し、義理父おやじに着いて行ったことを後悔していた。

その時――

「・・・かえでっ！」

下校途中の生徒たちの中にかえでとその友達が数人、歩いていた。その表情は、とても楽しそうで、幸せそうだった。

「まっ、考えても・・・しょうがないってのっ!!」

自分に勇気を与えるように、語りかける。

っし、行くぞ、俺はかえでが振り向いてくれるまで、話しかけるんだっ。

今度こそ、そう呟きながら、零は教室を出て行った。

「かゝえでさんっ♪一緒に帰ろうぜいっ」

零は、かえでに追いつき、声をかけていた。

「かえで・・・どうするのさ。此処までしつこいのは、始めてだよ・

・・・」

「ふんっ」

「・・・アレ？こんな反応をするかえでも初めてなんだけど・・・」

零の方はというと――

「ああ・・・俺今すっげー死にたい・・・」

メンタル面で死んでいた。

でも、めげないっ。お兄ちゃん、めげないんだぞっ。

零は、心の中で繰り返しつぶやくと、かなでの近くに――

「おい、零とやら」

突然声をかけられた。それも、零の嫌いな男の声で。

「・・・何か用？」

零は軽くあしらう。それは相手も見ずにやったぐらいで・・・。

「それ以上櫻庭に近づくと、俺が容赦しねえ・・・」

「ちょ、大機っ。こんなところで喧嘩なんて――」

「男にゃあゝ譲れねえもんがあるんだよ・・・」

ごめん少年、俺も櫻庭なんですけど・・・。因みに、俺の譲れなもんはかえでだけなんですよ。

零は、勘弁してくれよ、とボソと呟きながら少年の方を向く。

っと、これはこれは・・・誰かと思いきや・・・。

「血祭りにあげたい男だったとはね・・・」

「あ？意味わかんねえよ・・・。っていうか、もう一度言う、それ以上櫻庭に近づくな。これは、警告じゃねえ、『命令』だっ!!」

「やばっ・・・。大機なだけに『本気』だよっ」

「加也・・・『き』しか合ってねえから・・・」

「五月蠅い、これは持ちネタなんだからっ」

なんだこいつら・・・。夫婦漫才かってんだ・・・。

「やってらんないよ・・・。悪いけど、かえでに用があるんでじゃ、といって零は手を上げる。

「・・・聞き分けが悪い子は、ちと仕置が必要だな・・・」

その時、零は感じた。背後で、いきなり大きくなる魔力、それは決してBランクとは言えないものを・・・。

へえ・・・。ちよつとはやるみたいじゃん・・・。

ポキポキと指を鳴らす大機。そして、魔術師同士の戦いが幕を開くための言葉を、冷たく言い放った。

「・・・『ゲート・オープン魔術兵装』・・・」

突如、赤い何かが大機の身体を纏まとう。

「・・・目に見える程の増大させた魔力・・・それが、あの赤いなにかの正体か・・・」

「ゲームのナレーションどーもおっ!!今から、お前をちよつとばかり痛めつける・・・歯あ食い縛つとけえっ!!!!」

侮っていたな・・・。こんなにも、魔力が強いやつがこの学校にいるとは・・・。

零は、身を構え、魔力の大きさによって吹き荒れる風、そして飛んでくる小石などから顔を防ぎながら、大機の様子をうかがっていた。

大機は、両手を合わせ、地面に向ける、すると――

「我鎮静ヲ求。^{ワレチンセイ}其ノ五〇〇……全テヲ破碎セヨツ!!!^{スベ}」^{ハサイ}

突然、手を向けた地面が大機の身体ごと沈下した。沈下していない所には若干ひび割れも起き、それだけで、かなりの魔力が練られているということが分かった。

ちっ……。よりによって、『直接魔術』かよ……。やりにくい。

「一瞬で片づける……」

「俺はおもちゃじゃねえよ……」

大機は一度、身体を沈める。沈下した地面のせいで身体が全て隠れたと思ったら――

「おおおおっ!!!!!!」

人間とは思えないほどの速さで零に向かって殴りかかっていた――
|。。。。

喧嘩しちゃいますっ!! (後書き)

バトルシーンを初めて入れましたが・・・下手、とか改善した方が
いいとか、なんでもアドバイスを下さい。

喧嘩しちゃいますっ!!

(2)

右にストレートのパンチ……。

零は大機の拳を予想する。そして――

「ビンゴっ!!……よっと……」

見事に零の予想は的中して、顔の右側をブンという鈍い音を立てて、拳は過ぎ去る。

大機は、その自分の速さに追いつけていないのか、そのまま数十メートルは離れる。

「随分とまあ、乱暴な子犬じゃねえか……。しつけがなってねえっていうの? こういうの……」

「ちっ……。まあ、腐った野郎にしては今の、よく避けれたな、褒めてやるよ」

「そりゃ、どーも。ま、お前はどんなに攻撃しても俺にカスリもしねえけどな……。!!」

「ぬかしてんじえねえよっ!!!――せええっ!!」

まさに猛攻突進。一直線に、零向かって飛んでくる。その速さは、数十メートルあった距離が一瞬にして無くなるくらいで――

だが、そんな一直線じゃ、俺には……。――

「あたらねえってのっ!!」

またも、どの方向に来るかを見切った零は、それを軽々しく避ける。それは、傍^{はた}から見れば完全なる実力の差だった。

「ちいっ……。まぐれじゃねえってか……。」

零は、ポキポキと首を鳴らす。そして、右手を相手に向け――
「ホラ、かかってこいよ。脳無しの猪さん」

指を自分に向けて二度曲げる。それは、挑発に使う動作だ。

まあ……。気を抜けば、やられるのは俺の方だけだな……。

速さもあるが、それよりも、たかが拳が横を通り過ぎただけで風を切る『ブン』という音が聞こえるのだ。正直、あたったらひとた

まりもないだろう。

「お望み通り・・・さっさと潰れろおおおおっ！！！！」

俺の顔面目掛けてか・・・。

身体を右に傾け零はそれを避ける。だが――

「まだだ――っ！！」

避けた、と思った同時に、背後で大機が叫ぶ。

まさか・・・っ。

零の予想は見事に当たっていた。

大機は、数十メートル離れる所を、足で踏ん張って、数メートルという単位にしていた。

「ちいっ!？」

「殺ったあああっ!!」

大機は、大きく振りかぶった拳を、一直線に身体ごと飛ばした。だが――

その先にあったのは、虚無感。

ブンという、空振り。

「な・・・っ!？」

またしても、避けられた。その実感が出てきたのか、大機は、数十メートル離れたところで顔をしかめる。

「くそ・・・今の、何故避けれた・・・っ!!」

「単にお前がおせえんだよ。・・・狙いは良かったけどな・・・」
この言葉は、お世辞でもなく、零の本心だった。

チリチリと焦げるような匂いと音がする前髪。そう、零はギリギリ、交わしていたに過ぎないのだ。

あぶねえ・・・今のは、本当に危なかった・・・。

零にとって今のは『避けた』ではなく『避けれた』だった。勘であり、野生の本能。どこが、どう危険でどう避ければいいのか、まさに、前者の二つに頼っていた。

「・・・畜生が・・・」

大機は周りを見渡す。そこには、野次馬が大勢居た。

「このままじゃ・・・いろいろと後で面倒だ」

「じゃあ、逃げるか？少年」

「ぬかせっ。・・・この状況だ、故に次で決めるっ!!」

大機はそう言うのと、ファイティングポーズをとる。そして、「ふう・・・」と一回ため息をつくと――

「ぜえええっ!!!!」

零に向かって、一直線に飛んできた。

「芸がないな・・・っ!!」

零は、それも下に屈み、軽々しく避ける――はずだった。

大機は、にい、と不気味な笑みを漏らすと――

「芸がねえのは、お前だってのおおおおっ!!」

そう言ったかと思うと、突然、大機の身体ごと零の足場が沈下した。

なっ・・・。足場が・・・。

零は、突然沈下した地面に前に屈んだ身体が対応しきれず、バランスを崩す。

そして、安定したと思った矢先、目に飛び込んできたのは――

「おらあああああっ!!!!」

大機の脚だった。

「がっ・・・!？」

零は蹴られた方向に派手に吹っ飛ぶ。

「ぐう・・・っ」

そのまま、地面に叩きつけられ、数メートル転がる。

吹っ飛ばされた分と転がった分を合わせれば、それは三十メートル行くか行かないかの長距離だった。

「避けてばっかだえ・・・芸がねえのは、お前の方だったようだなっ!!!!・・・はあ、はあ・・・」

大機は、零を吹っ飛ばした方向、そして土煙が上がっている所に向かって言い放った。

さすがに、魔力を使いすぎたのだろうか、大機の大声は、徐々に

弱くなっていき、終いには肩で息をするくらいになっていた。

「これからは・・・はぁ・・・。櫻庭に近づくんじゃ、ねえぞ・・・
つくっ・・・」

大機は、土煙を一瞥して、背を向ける。

近くに寄ってきた加也を手で止め、大丈夫終わった、と告げる。

だが、それは大機の大きな間違いだった――

「いっつう・・・。効くなぁゝ今のは・・・」

モクモクと土煙が上がる中、零の声が響き渡る。

「な・・・っ!？」

完全に仕留めたと思っていた大機は大きく目を開け、驚きを隠せないでいた。

「とっさに、俺の行動を把握して、パンチで飛んでる際に俺が屈んだのを見て、強制的に魔術展開を足に使って、その足で地面をたたき、自分の勢いを止めるストップパー兼俺の足場を奪う作戦・・・」

そう、それは、相手の行動を遥かに先回りして、行動しなければならぬ作戦。そして、それは相手の行動すらも完璧に把握しなければならぬという難しい行動。

それを、軽々しく大機はやってのけてしまった。これは、天賦てんぷの才さいと言ってもいいほどだった。

だが、それを自負ながらも、知っている大機こそ、それを受け止めた零が信じられなかった。

「どうして・・・いや、どうやって・・・どうやって今のを防いだっ!？」

「防いだ?・・・違うね。俺はお前の行動そのものを読み取っていた。さすがに、こうなるとは思ってもいなかったが、頭の隅では予想はしていた」

零は、義理父に戦争まで着いて行った人間である。こんなことは、何回か受けてもいいだろう。つまり、今のは意思で防いだというよりも、人間の神秘、身体に染みついた動き『反射』を使ったのだ。

「まあ・・・おかげで、ガードした両手がボロボロだ・・・」

「・・・一体お前は。・・・いや、今はそんなことはどうでもいい・
・」

大機はもう一度、拳に力を入れる。

「何度でも立ち上がるってんなら、俺は何度もお前を倒すだけだ・
っ!!」

「カッコイイねえ・・・・でも、一つだけ、教えといてやる、小
僧」

先ほどまでと打って変わって、零の声が変わる。

それは、理事長の前で見せた声質と同じで――

「勝てねえ相手には、戦わねえことだ・・・・決して逃げる訳じゃ
ねえ・・・・それも一つの作戦だってことだ・・・・」

これは、零が魔術戦争で学んだ最大のことだった。

「・・・はっ。それは今のお前に似合うんじゃないか？」

「驕るなよ小僧？・・・・まあ、良い。今から、お前と俺との『絶対
的な力の差』ってもんを見せてやるよ・・・・」

「御託はもう、うんざりだ・・・・!! さっさと、堕ちろおおおお
おおっ!!!!」

大機は、再度拳を振り上げ、零に向かって飛ぶ。

零は、そっと右手を大機に向けて、手の平を見せる形にする。

そして、零は小さくつぶやいた――

「『魔術解除』・・・・」

手の平の前に突如、身長と同じくらいの青色をした魔法陣が現れ
る。

「はっ・・・・!! ただの防御壁かああああっ!？」

大機はその魔法陣にありったけの力で拳を振るった――・・・・。

喧嘩しちゃいますっ!! (3)

零が出現させた魔術『魔術解放』ゲート・リセルト

それは、果てしない水の都、海を連想させる色だった。術式、形式から見ても取れる形は、防御系魔法陣に過ぎず、ただ、地上とは異なった異質の空間を、描いていた。

身体はどこか一部の働きを、魔術により格段、上昇させる直接魔法。大機は、それを脚と、両手に使っている。そんな大機の目の前に、防御系魔法陣は、挑発と同レベルだ。

大機は、右手にありったけの魔術を乗せ、その拳で、魔法陣目掛けて振るう。

突進していた速さも、拳の力に加担され、大機の立っている足元が、浅く沈下していることからその威力が測り知れた。

2倍、いや4倍とでも言っても過言ではない。

だが――

「・・・なっ!？」

血の用に赤い魔力を纏っている拳。だが、その先には、それとは真逆の深海が広がっていた。

確かにあった手ごたえを、噛みしめるように思い出す。それは紛れもなく現実で、だが、零の魔法陣を突破することは出来なかった。「バカなっ!？」・俺の魔力を格段に上げた一撃だぞっ!！」

大機は、いとも簡単に止められた悔しさ、喪失感の入り混じった悲痛な声で叫ぶ。

「悪いな、小僧・・・。そう簡単には、この魔術は壊せんのだよ」すー、と鋭い刃のような瞳は、凍てつくような声と共に大機の意思を凍らせる。

「この魔術はちょっと特別でな・・・。確かに、中身はただの防御系魔法陣に過ぎない。でも、それだけじゃあ今の攻撃は止められない、そうだろ?」

零の目は、深海で餌を見つめる海のヌシそのものだった。

「これには、魔術解除という名前が付いている。魔術用語で分かりにくかったかもしれないが、これはそのまんまの意味をあらわす」

「・・・魔術・・・解除」

声を出すのがやっと、とでも言うかのように、か細い声が零の言葉のリピートする。

「これに触れたものは、有無関係なく、魔術が解除される。それが、この魔法陣の正体って訳だ・・・。だが、小僧、貴様も知っているように、魔術は魔術でしか破壊、相殺することは出来ない。つまり、元は防御系であるため、ある一部の特殊な魔術以外は、これを突破することは出来ない」

「無茶苦茶・・・じゃねえかよ・・・」

魔術を使えば、解除され、だからと言って、ただの実物をぶつけても、あの魔術は破壊すらない。言いかえれば、絶対防御に等しかった。

「もう一度言う、勝てない相手には、戦うな。これは、警告じゃない、現時点での命令だ」

大機は、悔しさでギリギリと歯を噛み合わせる。

誰よりも強くあり続けたい、好きな女の子の前では、恰好をつけたいがために、練習をした毎日が、大機の中で、シャボン玉のように浮かんでは消えていった。

「・・・らめれっかよ・・・」

「・・・決心がついたか？」

俯いている大機は、言葉を自然に漏らす。好きな女の子にカッコイイと認めてもらいたいためではなく、攻撃を仕掛けたくせに返り打ちにあった悔しさでもなく、ただ、目の前に居る敵を倒すために――

「諦めれっかよおおおっ!!」

突如、覇気を取り戻した大機は、勢いよく立ちあがり、バックステップで二歩、三歩とさがる。

「まだやるのか？・・・結果は決まっただろ？」

「何が魔術解除だ・・・」

大機は、零の鋭い目に対抗するかのように、睨みつける。

「最後まで・・・付き合ってくれよ、解除やろおおおっ！！！」
突進には至らず、だが、魔法陣目掛けて、拳を振り上げては降ろし、振り上げては降ろした。吹き荒れる風のごとく、振るわれる拳。その一撃一撃には、大機の全てがかかっていた。

「ぜえええええっ！！」

だが、そんな努^{じどう}濤の如く降りかかる赤い一閃は虚しくも、魔法陣の前では無力に過ぎなかった。

「——くっ。まだだっ、まだ終わらねえええええっ！！」

「・・・」

何を彼がそうさせるのか、零には一切分からなかった。ただ、あ
るの^は悔しそうな表情をしている大機の顔だけ。

やがて大機の拳からは、魔力の象徴であった赤の帯が消え、すで
に空^{から}となったも同然だった。

「ちく・・・しょう・・・」

「無駄だ、小僧。何度やっても、俺は倒せないし、結果は同じだ」
疲れ切った大機の表情。肩で息をすることが、当然のように、そ
して右のストレートが最後となった。

拳には、魔力の赤い帯の代わりに、魔法陣を殴り続けたことによ
って、切れ赤い血が流れていた。

ヴウウウン——

零は、その拳を見て、魔法陣を閉まった。決着はついた、それは
どこからどう見ても、零に軍配が上がったのだった。

「——大機っ！！」

可愛らしい女の子が、悲痛な叫びと共に、大機の元へ駆ける。崩
れ落ちる身体を、地面に着く前に間一髪のところを支える。

ドサ——

女の子一人の体重と立派になった男の体重とでは比にはならない。大機を支えた女の子は、共に崩れる。それでも、女の子は、大機が怪我しないようにと、自分が地面側に倒れる。

よく見たら、かえでの友達じゃん……

「大丈夫、ねえ大丈夫なのっ！？大機いつ」

静かに寝かせ、大機を横から見守る加也。目には、大粒の涙を溜めていた。

「は、ははは……騒がしいって、いつも言ってる……だろ？」

「何バカなこと言ってるのよお……」

「そんなことより……ちよつと……耳、貸してくれない、かな……？」

加也は、言われた通り、自分の身体を大機に倒し耳を向ける。だが——

大機は、耳ではなく、加也の胸を引っ張り、そして顔を埋めた。^{うず}

「すまん……借りるぞ……」

「……うん……」

加也はその意味を一瞬で理解し、大機の頭に手を回し、抱きつくような格好になった。

「うつ……くっ……ちく、しょう……っ……うつ」

大機は、男の中の男だ、そう感じとり、零はそつとその場を離れる。

そして零は去り際、大機に聞こえるように、呟いた。

「名前は……？」

「っ……だい……き……」

声は揺らぎ、滲む。だが、ハッキリと答えた。

「ダイキ……。俺は、漢字が苦手だ、明日学校で、教えてくれ」

それは、零の精いっぱいの優しさであり、そして大機を認めた証

抛だった。

零は、そのまま立ち去る。だが、零は聞いたのだ。聞き耳を立てないと聞けないくらいの声で――

「・・・任せろ・・・」

と言ったのを――・・・。

それぞれの道ですっ!!

「今思えば、どうしてあんな戦いをしたんだ、俺は・・・」
元はと言えば、あの少年が攻撃したからであって、俺には何も非はない・・・はずだよな・・・。

零は、大機が惚れているかえでにしつこく声をかけていたため、怒った、ということは思いもしなかった。

その時――

「前城くん・・・可哀想だよ・・・？」

その声は、どこか聞いたことがある声で。

零が前を向いた先には、愛しの妹、かえでが立っていた。

「い、いや、アレは不可抗力というか・・・」

「詳しいことは、家に帰ってから聞きますっ」

両手を腰に当て、ぷー、と頬を膨らますかえで。だが、その行為がまたかえでを可愛くしているということに、気づいてはいない。

そのまま、かえでは後ろを向き歩き出す。

ほんと、変わったな・・・。

夕陽に輝く、肩まである栗色の髪。可憐で整った顔立ちに、どこか儚さが備わっていて、いわゆる『守りたくなる系』の美少女だ。すると、かえでは零が止まっていることに気が付き――

「ほら、行くよっ・・・お兄ちゃん・・・」

零の方を向いて、呟く。とくに、後ろの方は、聞きいらないと、聞こえないくらいの声で。

だが、零にはそんなのは関係なく。

今、お兄ちゃんて、お兄ちゃんって・・・。

かえでの頬が赤く染まっているのは夕陽のせいなのか、それとも違う何かなのか、零には分からなかった。

「あれ・・・あいつらいいのか？」

「・・・私は、加也ちゃんの気持ちを優先するから・・・。そこま

で空気読めくないよ」

まあ、かえでがそう言うなら、それでいいんだけどね……。
零と、かえでは、距離は離れながらも同じ道を帰りだした――。

「これはまた、どエライ奴が来よったなあ……。」

野次馬の中である男子生徒が呟く。

その関西弁を使う生徒の視線は、学院内でも可愛いと言われるかえでと、楽しそうに帰っている零一人に向けられていた。

「同じクラスとして、がんばりまへんとね……」

男子生徒は、そう言い残して、野次馬の中に消えていった――。

「とくに問題は無し。怪我は両拳のみ。ただし、魔力の残量に問題あり。これから一週間は授業でもなんでも、魔術を使うことを禁止とします……」

それは、保健の先生に言われた言葉だった。

野次馬の騒ぎを聞きつけ、駆けてきた先生により、保健室へと運ばれた。

横では、その言葉を噛み殺すようにつぶやく加也が居た。

「……ったく、どうしたんだよ。お前らしくもない……」

大機を見て、つらそうに顔を伏せている加也に明るく語りかける。
だが、返事は返ってこなかった。

「一週間って、きついよな。どうすんだろう、俺って学校休んでも良いのかな？」

苦笑しながら、大機はなおも語りかける。

「……知らないよ、バカ機」

やっと、なんか言ってくれた。でも、なんでこいつこんなに元気

がないんだ？

「おいおい、バカ機って、さすがに無理やりすぎだろっ」

「そうかもね・・・」

ほんと元気ないな・・・いつもなら「バカじゃないの、ムキになっちゃって」って高笑いしそうなものにな。

「・・・バカ機は、無茶、しすぎだよ・・・」

「無茶って、そんなこと——」

「——だって、魔力残量、結果で0なんだよっ！？・・・それが、どんな危険なことか、分かってないっ！！」

「そんなに怒鳴ることないだろ？・・・それくらい俺にだってわかって——」

大機は、静かな口調で加也を落ち着かせようと言の葉を紡ぐ。だが、その言葉はまたしても加也の怒声に遮られた。

「——分かってないっ！！命に関わるかもしれないんだよっ！？」

そう、魔力を空にすることは、魔術師で言う『禁忌^{タブー}』だ。なぜなら、今加也が言ったように、下手したら、死ぬ可能性もあるからだ。今はもう大体の人間に個人の差はあるが、有限の魔力が宿っている。それは、使った分だけ、減り、休めば、それを元に戻すことが出来る。

例えるなら『唾液』と同じで、身体の一部のようなものだ。それを、空にするということは、一部を失うということで、身体バランスが大きく崩れることを表す。

「・・・大丈夫だ、今こうして俺が此処にい・・・る——」

自分の好きな人が俺のようなことをしたらと思うと、加也の気持ちも分からないではない。大機は、なるべく優しく、明るく語りかけようとした。だが、それは、虚しく終わった。なぜなら——

「加也・・・お前・・・」

加也の目には、大粒の涙が溜まっていたからだ。

「大丈夫・・・なんかじゃないよ・・・。大機は、大機は私にとって、家族も同然なんだよ。その家族が危険な目にあって、全然大丈

夫なんかじゃないよ・・・っ」

その悲痛な声と、大粒の涙を見ていると、大機は急に切なくなつて、申し訳なくなつて、自分でも分からないまま――

「・・・ごめん」

――謝っていた。

「・・・こっちこそ、ごめん。あはっ、なんか私らしくないねっ」
涙を袖で拭いて、無理矢理笑顔を見せる。

「私らしくない・・・ねえ・・・」

「なにさ・・・？」

「いゝや、昔のお前が今のお前を見たら、なんて言うかなつて」
大機は、気分転換、とでも言うように、笑顔を向ける。

「きつと『こんなの私じゃない』ってわんわん泣くよね」

確かにな・・・。昔のお前はいつも俺の後ろに隠れて「大機くん、置いてかないで」って言つてたくらいだから。

そう言えば、こいつ、いつから性格が変わったんだっけ・・・。

大機は、記憶をさかのぼる。そして――

ああ、そっか・・・。伯父さんが死んだ時だ・・・。

その時、大機の中で一つの可能性が浮かんた。

そっか・・・。こいつ、死ぬことに敏感になつてんだ。だから、俺が無茶したから、怒つて・・・。

「どうしたの？ 黙っちゃつて」

「ん・・・？ いや、なんでもない」

ったく、お前は、お前でいろいろと、経験してんだな・・・。

大機は、無意識のうちに加也の顔を見つめてしまつていた。

あれ・・・。こいつってこんなに――

「あれあれ？・・・私の顔なんか見詰めちゃつて、恋でもしたかな？ うん??」

大機は、視線を天井に向ける。

「そ、そんなじゃねえよ・・・大体俺は――」

「かえで、でしょ？」

「うっ・・・」

くそ、正解だから言い返せねえ……。でも、どうして俺はこいつのことを――

可愛いと思ってしまったんだろう……。

保健室の前に一人の男子生徒が立っていた。身長は、中学生にも見えないだが、その制服は確かに高等部の物で、襟には「S」と書かれた銀色のバッチが付いていた。

「へえ……そんなすごかったんだ……。僕も見なかったなあ……」

その男子生徒は保健室の横にある壁に手の平を当て――

「『ゲート・リセルト魔術解除』……」

その手の平には、あの青い魔法陣が描かれていた――……。

会いたかったよ、お兄ちゃんっ!!

目線の先には、怒りながらも、軽くステップを踏み、綺麗で音程がしっかりと取れている鼻歌をしながら、妹、かえでは歩いている。零はそんな妹の姿を見守るような感じで後を着いていた。本当なら、零自身も、すぐにかえでに飛びつきたいのだが、残念ながら、変態扱いは必須なので抑えることにしている。

ああ・・・くそ、こんなに近くに居るのに、触れられないなんていや、決してやましい気持ちなんて、これっぽっちもないんだよ。でも、お兄ちゃん、このかえでとの間が遠く感じるよっ。

「か、かえで、もう良いだろ？」

もう、我慢の限界っ。俺、無理っ。

零は、か細い声でかえでに語りかける。

すると、かえでは、綺麗な髪をなびかせて身体を零の方へ向ける。

「ダメだよっ・・・今、私は怒っている最中なんだからっ!!」

畜生・・・怒りながらも、怒っている最中って言うのがまた可愛いつ。くそ、反則だぜ、そんな攻撃・・・。

大袈裟に落ち込む零見て、かえでは小さく微笑む。そして、少しだけ、歩く速度を速めた。

「・・・私だって、話したいから・・・色々」

「かえで・・・」

もう、社会的に死んでもいいつ。きっと生きていける、俺はかえでを見るだけで生きていけるぞっ。

「だから、家で話しましょう・・・ね？」

「・・・了解っ!!」

ビシっ、と敬礼をする。

「それでよろしい・・・ふふっ♪」

可愛く声を低くする。上司のつもりだろうか・・・。もし、かえでが上司だったら、全てを尽くすんだろうな、そう思いながら、小

さな背中を見つめた。

その時、零はかえでの可愛さに惚れていた故に、一つミスをしてしまったことに気がつかなかった。

手を伸ばせば届きそうな距離にかえでは居た。

今、自宅に着き鍵を使って玄関を開けている最中だ。

「ん・・・しょっと・・・開いたっ♪」

小さな声で、独り言を呟るかえで。

ガチャ――

お馴染みの音で玄関が開き、その中にかえでは消えていく。零もそれに続いた。

「・・・変わってねえなあ・・・」

零は入ると同時に感嘆に似た声を上げる。理由は簡単だ。零が義理父に着いて行く時最後に見たのがこの玄関で、そしてどこもかしこも、記憶と重なったからだ。

と、その時――

「うわっ・・・とっ!？」

突然愛しの妹かえでが、零に飛びついた。

そして、かえでは両手で零の服をしっかりと握ると――

「うっ、うぐっ・・・ぐすっ・・・」

「・・・どうした、かえで？」

零は突然飛びついてきたかえでに優しく声をかける。

「お、お兄ちゃん・・・お兄ちゃん・・・おにい、ちゃ、んっ・・・
・会いたかったよ、お兄ちゃあああんっ!!」

かえでは、思い切り零の胸に顔をこすりつける。それはまるで、ある小動物が相手の確認に行うための動作に似ていた。

「うわあああああんっ!!!」

零は今更ながら気がついた。義理母おふくろが来ないことに。

そして横を見ると、そこには義理母の写真が飾ってある仏壇が置いてあった。

そうか……。俺が居なくなり、義理父おやじもいなくなり、終いしまには義理母まで居なくなつて……。ずっと、一人だったんだな……。

「さみしかったよおおおおっ!!……うう、ううううう」

零はそつとかえでの頭に手の平を乗せ摩る。

「大丈夫、大丈夫だって……。俺が此処に居る。帰ってきたんだ……だから、な？」

「うん……。うんっ!! お兄ちゃん……。本当にお兄ちゃんだあ……。うう……。スンっ」

よしよし、とかえでを慰める零は、とても優しく、普段の変態的な行動、思考は寸断していた。

「かえでは……。ずっと、一人だったのか？」

ううん、と零の胸で顔を横に振る。

「お兄ちゃんが、出て行って……。四年したらね……。義理母おかあさんが、病気で死んじゃつて……。それから、一人だった……」

つてことは、少なくとも三年間は一人という計算になる。正直、まだ高校一年生にとっては、受け止めがたい現状だろう。

世の中には、それが原因で会話が少なくなったりとか、殻に閉じこもる人も少ないわけではない。ましてや、かえでは女の子だ。相当つらかっただろう……。

「よく頑張ったな。かえではえらいな……。強い子だ」

「……。お兄ちゃんは、もうどこにも行かないよね？ 私を、独りにしないよねっ？」

かえでから漏れる言葉、それには不安だらけの弱弱しい声だった。

零は、大きく頷き——

「ああ、もうどこにも行かない……。だから、安心してくれ、かえで」

そのために戻ってきたのだから。

零は、摩るようにかえでの背中をとんとん、と叩く。

「お兄ちゃん……。お兄ちゃんは、やっぱり、お兄ちゃんだね・
っ♪」

「なんだよ、それ」

零は苦笑気味に言葉を返す。

かえでは、もぞもぞと顔を上げ、零を至近距離で見つめる。
まだ目は赤く充血したままだが、それでも明るく微笑んだ。

「お兄ちゃんは、お兄ちゃんのままだねってことだよっ♪……。う
ん、変わらないっ♪」

「……。お兄ちゃんとしては、『変わらない』って言葉、喜んで良
いのか悪いのか、ビミョーな位置なんだよねえ……。かえで、
俺、カッコよくなったか？」

「うんっ♪……。全然変わらないねっ♪」

「……。ソ、ソウデスカ……」

零は、心という何かが、崩れる音を聞いた気がした——……。。

自宅へ入りますっ!!

かえでは、零の懐ふところから、名残惜しそうに抜けると、上がって、と笑顔で言う。

若干目が赤いのが気になるが、そのことには触れず零は七年ぶりの自宅内へ足を踏み入れた。

「えっと・・・位置は、あんまり変わってないと思うよ。・・・だから、リビングで寛いでいて・・・」

「かえでは、どうするんだ？」

「着替えだよっ♪・・・覗いちゃ『ダメ』、なんだからね？」

可愛らしく、かえではダメの部分強調する。

これは、アレか。前振りか・・・。見るなよ見るなよ・・・の。だったら・・・。

「・・・はあ・・・。ダメだ。いつもの俺が発動しねえ・・・」
変な妄想をしてしまうと、零の名前を叫んで、つらい思いをぶちまけていた時のかえでを思い出してしまう。

そうすると、なんだか、自分が情けなくて仕方がなかった。

大切な妹に・・・なんて思いさせちゃったんだろうな・・・俺・・・。

っと、かえで自身、頑張って気持ちの入れ替えをしているんだ。俺が、こんな感傷になっててどうするっ。

トトトつ、と階段を昇っていくかえでを見守り、見えなくなったらリビングへ向かった。

確かこのドアを開けて――

「おお・・・」

ほんとに、あの時のままだっ。

そこには、物こそ新しくなっているが、テーブルの位置や、テレビの位置。細かいところまで、零が家を出る直前とほぼ同じだった。

「・・・こんなところに、今はかえでが一人で・・・」

櫻庭家は決して大きいわけではない。外見からしても、そこらへんの住宅と何ら変わらないし、構造だって似ている。残念ながら□ラーメンではないのだが・・・。

そして零はこう思ったのだ。

初めて彼女の家に行った時とか、こんな感じなのかな、と。

だってさ、見新しい物が多くてさ、確かに名残はあるけど、それでも、キヨロキヨロしてしまうくらいなんだよっ。それに――

「今、此処には俺達だけっ!!」

「どうかしたの、お兄ちゃん？」

――っと、いかん・・・。あまりにも興奮しすぎて、口から出したいという欲望に負けてしまった。

零は、なんでもないと軽く答え、もう一度見渡す。

ああ・・・状況まで後押ししてくれますかっ。・・・なんとも、光栄なっ。きっと神様も、俺を応援してくれているんだなっ、まあ、神サマも仏サマも信じないけどなっ。

「・・・どうかした、お兄ちゃん？」

「・・・え？」

愛しのかえでの声が聞こえたのは、耳元で、それはとても現実味のある声質であって・・・。

あれあれ。どうしてこんなところに、マイハニーがいらっしやっているのか。

「お兄ちゃん・・・身体をくねらせて・・・」

・・・ああ、これ知ってる。『死亡フラグ』ってやつだ。

零の脳内では「キモっ、なにそんなに身体をくねらせてんのっ！もしかして、アッチに興味があったりとかっ」と言う、残酷なかえでが動画として流れていた。

「熱とか、あるの？」

「・・・は？」

熱って、あの温かいアレのこと・・・だよな。

「だって・・・お兄ちゃん、昔から熱があると、私を誰かと見間違えて、くねくねしながら、私に抱きついてきたでしょ？」

「あ、ああ・・・。いや、今は、大丈夫だ・・・」

っていうか、そのことだけど、俺、ネジが風邪で飛んで、単に欲望に素直になったただけなんだけど・・・。

零はそれを言うのと、今度こそ、残酷なかえでの動画が本物になりそうで、だから、それは内緒にしておいた。

「ほんとに?・・・疲れてない?」

ああ・・・かえだが、ものすごく天然でよかった・・・。あ、一応は助言しておくが、かえでは、『アホ』じゃない、『天然』だっ。「ほんとかなあ・・・。お兄ちゃん、無理して頑張る時があるから、心配だよ・・・」

そう言っ、かえでは、零の方へ向かって歩き出す。

「つたく、かえでの心配性も治ってないなあ・・・。って!？」

その時、突然零の顔が、かえでの頭の方方向に持って行かれ、そして――

ゴッ――

零と、かえでの額が勢いよくぶつかり合い、そして鈍い音を奏でた。

「――ッ、ってえ・・・」 「――ッ!?」

二人して声にならない悲鳴をあげる。

「うう・・・。ごめんねえ、お兄ちゃんっ・・・」

「いや、別に良いけど、さっ。どうしたんだよ、急に・・・」

零は、頭がぶつかった際に尻もちをついたと思われるかえでに手を伸ばした。

「うう・・・失敗しちゃったよお・・・」

涙目で、上目づかいは半端ない。零は、もう何を言われようが、されようが、許す気になっていた。

「・・・で、何に失敗したんだ？」

俺に出来ることなら、なんでも叶えてあげたいしなあ・・・。
零はかえでの次の言葉を待った。心なしか、かえでは頬を赤く染める。

「・・・——ろうとしたの・・・」

「んあ？・・・ごめん、もう少し大きく」

かえでは即急に後ろを向いて、ううう、と小さく唸る。

「だから・・・っ！！・・・熱を、測ろうとしたの・・・っ」

「熱・・・って、まさかっ!？」

額を・・・俺の額と、かえでの可愛いおでこを——

「あう・・・恥ずかしいっ・・・。ご、ごめんね、お兄ちゃんっ。
忘れてっ・・・」

そう言い残すと、さっさと台所に向かっていった。

「・・・あ、あああ・・・。かえでとの、初はつくっつけがあゝ・・・」

零の頭の中は、真冬の景色も同然だった。

でも、めげないっ。いつか、いつか、本当の風邪を引いて、引いて、引きまくってやるっ。

そして、零はまた一つ、また一つとかえでとの淡い夢を描いていたのだった。

その淡い夢さえも、悲痛な姿をしたかえでに遮られたのは、言うまでもない——・・・。

時は遡さかのぼり、零が自宅に着いたころ。

一人の女生徒が、校舎の屋上で、戦いの残骸を無表情で見つめていた。

制服は、大等部だいたくぶの物。つまり、一般で言う大学生だ。

「・・・K a t a s t r o p h e・・・D i e U n t e r s u c
h u n g・・・」

日本語ではない言葉を呟く。手元には、身長より、二倍はあろう

かという大砲に似た、赤色の何かを丁寧に磨いていた。

「・・・やっと、見つけた・・・」

無愛想と言った方が合っている彼女の表情は決して変わらない。

だが、彼女の鋭い眼は、全てを凍てつかせるような、そんな威圧が漂っていた――・・・。

自宅へ入りますっ!! (後書き)

□ || ボックスということでは・・・

接触しちゃいますっ!! (前書き)

すみません。身体の調子が本調子ではないので、短い文になってしまいました。

本当にごめんなさい。

次回は、書けるように頑張ります・・・。

接触しちゃいますっ!!

何時間経っただろう。零は、真っ赤で、でも真っ暗な、とても変な気分を味わっていた。

此処は・・・どこだ。なんだか、懐かしい気が、す、る――

零の目の前には、決して思い出してはいけない、忘れようとした過去が突然目の前に映った。

「――っ!？」

ガバ、と上半身を勢いよく起こし、辺りを確認する。

そうか、此処は、俺の部屋だ……。あの後、二人で色々話して、そして寝たんだ。

身体がじめじめする。いやな汗だ。手の平には冷や汗が付いていて、そして、少しくラクラする。

「風邪でも、引いたか？」

そうだったらいいな、と苦笑しながら、額に手の平を当てる。すると――

「――っ!!!」

そうか、そうだったな……。今、俺はアレを見ていたんだ。

両手を握りしめ、ベッドに叩きつける。無性に悔しかった、アレを思い出すと、悔しくて、悔しくて、悔しくて――・・・。

畜生が……。っ。一生、俺は、罪を背負って行けてかよ……。

シーツを、思い切り握りしめ、そして、夢を振り払うように頭を揺さぶり、ベッドから立ち上がる。

時間は、いつもの起きる時間と同じにして、四時。

少し早い、学校の準備でも、ということで、久しぶりの制服に手を通した――・・・。

階段から、下りて来る足跡があった。それはきつと、零の愛しの

妹のであつて。

「ふぁーふう……。おはよう、お兄ちゃん」

ああ、可愛いっ。可愛すぎるっ。寝ぼけて、涙を溜めている半目に、ダボダボのシャツ、似合い過ぎているっ。

零は、昨日、出来なかった妄想をフルに活用し始めた。

「おはようかえで。お兄ちゃんが服を脱がせてあげようか？」

軽い口調で、零は変態ネタを暴露する。それに動じた気配を見せないかえで。

アレアレ……。なんで無反応なの……。

「お兄ちゃん……。私はもう大人なんだよお。そんなの一人で出来るもんっ」

あ、やべ、鼻血出そう。

零は必死に鼻を押さえる。

「どうしたの？お兄ちゃん。もしかして、花粉症？」

おおっ。これまた古い病気を……。

花粉症、今はもう発症はしないとされている病気、らしい。かなり古いものだとは聞いている。

「違う違う。なんでもないよ」

「そっかつ♪」

その笑顔が俺を殺すっ。悩殺され放題だ。

「っと、顔洗ってくるね？」

「おう、ゆっくりな」

トテトテと可愛らしく歩いて行くかえでを見送ると、零は、朝ごはんの支度をしたのだった——……。。

「鍵の閉め忘れは無いな？」

零は、かえでに尋ねる。それを、笑顔で——

「無いよっ。私たちの家には誰も入れさせないからねっ♪」

私たち……。お兄ちゃん、勘違いしちゃうよ。別に、本当に結

婚して私たちの家にしても良いけどねっ。

その時、零と、かえでの二人の前に一人の少女が立ち上がった。

「・・・見つけましたよ」

その少女の言葉は、零に向かって言っているものだった――・・・。

独裁者現れちゃいますっ!! (前書き)

ごめんなさい……今回もまた、短いです。。。

独裁者現れちゃいますっ!!

「――!？」

零の横で、息を飲む気配がする。かえでも気付いたのだろう、微かながら冷酷な彼女の魔力が。

「どうした? かえで」

零は、まるで何も見ていない、感じていないかのように接した。
なぜなら――

「い、今、前に誰かいなかった? お兄ちゃん……」

そう、かえでは、見えていないのだ。いや、正確には『見ることは出来なかった』だ。

何者か、ただ女と言うことだけは認識できたが、コンマ単位の速度で、零たちの前に現れたのだ。

「何言ってるんだよ。しっかりと、前を見ろ。誰もいないだろう?」

「で、でも……っ!! ほんとに、居たんだよ……」

嘘をつくのは、あまり好きではないのが、零だ。だが、このことにかえでを巻き込んだら、危ないようなそんな気がして――

「――分かった分かった。次は、俺にも見えるかな?」

(気配の『完全消去』に加え、コンマ単位による秒速を超える『瞬間移動』……魔術戦争以来だな)

横で、むくと唸るかえでを横目で見ながら、意識を後方へ飛ばす。
『後方認識』――魔力を意識と同調させ、その魔力が映す景色を、自分でも見れる魔術。

(捉えた……っ!!)

目の前に現れた女の冷酷な魔力と同じ質を探し当て、意識を同調させる。

黒く長い髪に、綺麗な紫色の瞳。体格は、154あるかないかの、至ってノーマルだが、肩には、その体形に合わない二メートルを優に超える魔術砲が担がれていた。

(……!!)

突然彼女が、こちらを向く。飛ばしているのは、魔力と意識だけに過ぎない故に、零の姿は確認されないし、そもそも実態すらそこにはない。完璧な潜入魔術——のはずだった。

グーテン
「Guten Tag……私の主様……」

彼女の瞳は、完全に零の姿をとらえ、そして言葉を発した。

(な……っ!?) この魔術が、バレた、いや、そんなはずはないっ。この魔術を認識できるのは——)

だが、そこで零は思い当たる節があることに気がつく。まさか、そんなことは無い、と思いながらも零は彼女から目を離すことは出来なかった。

ベルティリング
「独裁者……Verrurteilung……」

そう言って、彼女は懷からアクセサリーを取り出す。形では、三角が四あり、ひし形になっていて、零のライフオースに似ている。だが、零は知っていた、この二つは、似て非になる物ということ。(やっぱりか……)

そこで、意識が元に戻される。横で、かえでが零を引っ張ったのだ。

「どうしたの? ぼーっとしてると、危ないよ?」

「あ、ああ、ごめん」

いつもなら、かえでに引っ張られただけで全身が痺れるような快感が来るのだが、零は、それ以上に彼女のことが気になって仕方がなかった。

最後に言った言葉、そして、『独裁者』

唯一、魔術戦争で、連合軍にも、反乱・統一軍にも属さなかった、新しい戦力。その名の通り、連合軍と、反乱・統一軍の間を取り、

勝手に仲裁をした軍だ。

一見、行いは善良に見えるが、裏では何か悪い企みを持っていると言われ、警戒をされた軍だ。そして、彼らの一番の得意技が、気配を消すこと。

（そんな奴らが、何故俺に接触を……）

零は、何か自分の知らない所で、大事が動き出している、そんな気がした——……。

かえでは、萌えですッ!! (前書き)

内容が……浮かばなくて、すみません。
今回は、詰まらない回です……。

その、内容、結構募集しています……。こんな回があったら良いの
にな、とかあったら、送ってください。その、それくらい……思い
浮かばなくて……。

今、実はワープロの方で、小説を書いていてそちらがメインに。そ
の作品が、出来て、余裕が出来たら、きっと頑張ります……。

かえでは、萌えですッ!!

「本当に、大丈夫、お兄ちゃん？」

かえでが、零の堅苦しい顔を腰に両手をあてて、前かがみ気味で覗きこむ。その表情と声色は不安と、心配に満ちていた。

かえでが……心配を……。

そんなに、怖い顔をしていたのか。

かえでの前で、そんな怖い顔を……

(かえでの……前……)

その時、零は不意にも、見てしまった。女であるあの部分を……。前かがみで、顔を覗き込むようにして、見てるんだぜ。決して悪気は……うん、無い。

「か、かえで……？ その……」

零は、言葉に出すのがつらくて、どもる。当り前の反応だろう、男として。

そして、かえでのアレを見て、零が普通でいられる訳もなく――

「もう少し、あっても良いけど。かえでのが、ベストだっ!!!!!!!!!!」
――壊れた。

「……？ えっと、ありがとう？」

おふッ。かえでに、あの、かえでに、『ありがとう』と、言われてしまったああああっ。どうしよう、ありがとう、って自信持って言える言葉なのに、疑問形って、もう……

(萌えだッ!!!! かえで、萌えッ!!!!)

「お、お兄ちゃん……ッ!？」

零は、これ以上は危険だと、理性ではなく、そして自分の意志でもなく、『反射』で、そばにあった壁を思い切り頭突きをしていた。ああ、かえで……。どうやら、頭も痛いけど、人間としても、イタイ見たいだ……

(こんな兄でも、許しておくれ……。そして、愛の契りい――)

ガツンガツンガツン――

零は、それから十分間、壁に向かって頭突き、そしてアレンジして一人ジャーマン・スープレックスを壁に向けて行っていた。

「と、いう訳で――」

スーパー頭突きを終わらせ、零はかえでと共に、クラスへ向かい、そして今は、教師の話を聞いていた。

いつ聞いても、欠伸が出るというか、なんというか……

この際、ハッキリ……詰まらん。

因みに、横の席は、いない。いや、決して、襲ったとか、違うから。……その目、信じて無いだろ。

零は、このクラスに入ってから、かえでにこんなことを言われた。

「席、変わってあげて？」

破滅へのロンドだ。その言葉を聞いた瞬間、頭突きの時の傷跡、おもに額から、ピューと勢いよく流血。

とまでは行かなかったものの、零の精神は破滅していた。

何故だ……。お兄タンじゃなくて、あのしけたつらしたキモガキの方が良いて言うのかッ。

ああ、かえでよ、お兄タンはさみしいぞ……。

きっとこれが子離れなんだな、と小言で囁く。

「ええい、五月蠅い。少しは黙れ、この性欲変態ッ!!」

すると、もう一方の隣から声が聞こえる。その声は、昨日戦って勝った相手の物で――

「五月蠅くねえよ。これは列記とした、妹観察なんだッ!!」

「何その堂々とした、変態発言ッ!? 考えろ、妹観察って、どう考えても変態以外答えがねえだろッ!! この変態バカッ」

「バカ……だとッ!? 俺は、バカじゃないッ。天然なんだッ!! 良いかっ、俺をバカ呼ばわりするということは、かえでもバカ呼ばわりしていることと同じなんだぞッ、むつつりバカッ」

「いやいや、意味わかんねえよっ!! なんでお前をバカ呼ばわりしただけで、櫻庭さんもバカ呼ばわりなんだよっ、キモ変態バカッ」

「兄だからだッ!!」

「それこそ意味わかんねえんだよっ!! なんでお前が櫻庭さんのッ——」

「俺も櫻庭だッ! 気付け、そして嘆けッ!! このムツツリーニ卿ッ!!」

その時、突然ポカと優しい衝撃が頭に響く。

零は、そつと上を向くと、かえでが居て。そして、周りは二人の喧嘩に耳をひそめていた。

「お兄ちゃん……五月蠅いよ?」

顔を少し傾け、疑問形で叱る。

くそう……鼻血が止まんねえぜ……っていうか、他の男共、見るなッ。

「お兄ちゃん……ダメだよ? こんなところで、鼻血出しちゃ……」

論点が違うッ。でも、可愛いッ。

もう、天然って素晴らしいッ。

因みに、かえで以外がこんなことやってたら、一発殴りますよ、ムカつくから……。

零は、その言葉に軽く頷き、静かにしたのだった——……

契約しちゃいますっ!!

例えば、無敵の力を手に入れたらどうだろう？ 全てを玉碎し、全てを焼き切り全てを——無に還す力が手に入ったら……。

犯罪？ いや、そんな生ぬるいものでは収まらない。文字通り『敵がいない』のだから。

☆

人々が寝静り、雑音一つの無い夜の世界。

俺は、その中をただ一人で歩いていた。

朝、俺が転入して初日目のこと。かえでは、楽しそうに授業を受けていた。

「『お兄ちゃんのために』か……」

俺はそんな無の世界で噛みしめるかのように呟いた。

全くもって、俺の目的と反対だ。

かえでに魔術という危険なものに関わらず、生きていてもらいたかった。

それに、タイミングが悪い。

「……早々に、この都市を潰すべきか」

魔術発展途上都市『グランダ』。戦争になれば、まず此処の兵士と魔術教師、生徒は必ず徴兵令を出される。そうなれば、かえでは戦争に出向くことになるだろう。

俺は、発展し都会となったグランダの中央に位置する『グランセントラル』へと目を向ける。

「眩しいな、ほんと」

静寂な夜を唯一壊す光。

そして、あそこには俺の目的の一つを達成する『市長』が在籍している。

「裏切り者にでもなって、かえでを助けるか？」

その選択もある、それを再確認するため声に出す。

……、まったく此処に来ていきなり迷いだすなんて考えもしなかった。

かえでを守りたい、ただそれだけの一心で此処に来たはずの俺が。

「手段なんて選ばないつもり、だったんだけどな」

俺は一度、空を見上げる。

都市の光にも負けず、皇后と輝く星々。

その時――。

「誰だ……」

背後に誰かがいる気配がした。と同時に、後ろを振り向く――ことが出来なかった。

「……!？」

「やほ、主様^{マスター}？」

耳元で聞こえる声、息使いで吐く息が俺の耳へとかかる。

俺は、いつの間にか両脇に手を入れられ、後頭部へと手を組まれていた。俗に言う『羽交い締め』をされている状態。

「……昼間の、独裁者か」

俺は、そんな拘束されている中で一言一言、言葉を選ぶ。

「……そんなに警戒しなくても良いよ？ 殺す気なんてマッサラだから」

「信用なんねえーんだよ、独裁者^{おまえら}は」

「ふふっ……、まあそれほど残虐かつ非道なことをやらかして来たからね」

「……昼間に比べちゃ、かなり言葉が柔らかくなったな。それは、俺を認めてくれたのか？ お前の主様^{マスター}として」

「そんな所。それよりも、良いの？ この都市潰さなくて」

「なっ!？」

俺の目的がばれてる……？

いや、そんなことはあり得ないはずだ。これは誰の命令でも無い、

俺の意思なんだから。

一筋の汗が、俺の頬を伝う。

「俺の目的を知った今、独裁者はどうするんだ？ 俺を殺すのか？」
返答によつては、俺がコイツを殺さなければいけない。

元々、弱みに付け込み独裁をするコイツらは、自らの不利になるようなことを見つけると、全力でそれを阻止するのだ。

例え当人を殺しても。

「私たちは、確かに此処『グランダ』を乗っ取ろうとしているわ。
そのためには、主様マスターも殺さないといけない」

俺は次の言葉を黙って待つ。

手にはすでに冷や汗で湿っている。羽交い締めをされている今、
どう考えても俺の不利。

それに、俺に気付かれずにそこまでする程の人間だ。

勝ったにせよ、俺が五体満足でいられる保証は何処にも無い……。

「そう緊張しない。大丈夫、私は主様マスターを殺しはしない」

「……。こういう風の吹きまわしだ」

「やっていることは、主様マスターと同じ。簡単に言えば『裏切り』」

「そんなことをしても、お前の得にはならない。いや、それ以上に
お前の不利になるだけだ」

「だから主様マスターがいる。……私が貴方マスターを主様と呼ぶにはしっかりと訳
がある」

裏切り者同士、調停を組もうってことか……。

確かに、俺としては楽になるが――

「それでも、お前には何の利益もない」

「疑り深いね、そんなんじゃモテないよ？ 主様マスター。私は、ただこの
都市がほしいだけ。ね？ 簡単でしょ。主様マスターがこのグランダを潰す、
そこに付け込んで私が『市長』となる。ほら簡単」

「『契約』って訳か」

返事の代わりに、小さく頷いたことが分かる。

この提案に乗れば、確かに俺の目的もコイツの目的も達成する。

良い案だ。それに何より、コイツは『出来る』。

「……ふふっ、良い顔になって来たね主様^{マスター}」
だが――

「失敗すれば俺達、それに此処に居る奴等が危険にさらされる」
俺たちが裏切り市長を殺しにかかる。もしそれが阻まれたら？
そして、それが干渉している三つの都市国家に知り渡れば？

簡単だ、すぐにこの都市を乗っ取りに来る。

「大丈夫。万が一失敗したら、妹と逃げればいいでしょ？」

「……さすがは独裁者だな。お前は口がうまい」

「褒め言葉として受け取っておくわ。それで……、どうする？」

「……分かった。その提案、乗ってやる」

「ふふっ、契約成立ね」

羽交い締めがゆっくりと解かれ、俺は深いため息をつく。
張り詰めた糸とはこのことだった、と初めて実感した。

「それで、私の名前は『ミリア』。ミリア＝フェイト」

「ああ、俺は――」

「知っているわ。『櫻庭 零』……『蒼穹』」

「……お前らは何処まで知ってるんだ？ プライベート空間なんて
無いように思えてきた」

俺たちは言われずして手を差し出す。

それをがっちりとかみ、契約の印でもある握手をした。

「……よろしく、主様^{マスター}」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1742s/>

妹は死んでも守りますっ！！

2011年7月7日00時24分発行